

**2019 年度前期 授業改善アンケート集計結果に対する意見**  
**—大学院全体—**

**経済学研究科長 岩崎 尚人**

大学院の学生による授業改善アンケートの本年度前期の結果は、総合的評価（項目 10「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」）が 4.93 であることから、例年同様に、概ね高い評価レベルにあると思われる。

「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した（4.80）」、「教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった（4.85）」、「教員は教室内が学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた（4.81）」などの諸点でも高く評価される傾向にあるとともに、授業で用いられた手法に関する設問Ⅲにおいても、質疑応答（70.7%）やディスカッション（53.3%）などのアクティブ・ラーニングが積極的に採用されていることが見て取れ、各教員の教授法の一層の改善の成果が現れていると考えられる。

資質・能力の向上に関する設問Ⅳの結果を見ると、大学院の授業では、学生は専門分野の知識・学力（92.0%）だけでなく、論理的思考力（69.3%）、構想力（57.3%）や柔軟な発想力・俯瞰力（それぞれ 50.7%）課題解決力なども身につけていることがうかがわれる。

今後も、授業改善アンケートの結果に留意しつつ、より充実した授業を行っていくことが望まれる。